

審査講評 第19回 日本水大賞委員会 審査部会長 虫明功臣

日本水大賞は、今回第19回を迎えました。審査部会長として、「日本水大賞」への応募状況ならびに受賞活動の審査講評についてご報告申し上げます。審査部会は、日本水大賞委員会のもとに各賞の候補を選考するために設けられており、水防災・水資源・水環境・水文化等多様な水分野をカバーする専門家や学識経験者18名で構成されています。審査は、「日本水大賞」募集要項に記された「対象の範囲」および「審査基準」を基に進められました。各賞の候補となった活動は、日本水大賞委員会に報告され、審議の結果、“大賞（グランプリ）”をはじめとする日本水大賞の各賞が決定されました。

応募状況

本年は36都道府県から、総数は昨年より15件少ない136件の応募をいただきました。応募活動を主体別に見ますと、団体が59%、個人が8%、学校が26%、企業が5%、行政が2%となっています。活動分野別では、水環境50%、水文化17%、水資源17%、水防災9%、平成24年に新設した復興支援分野が7%となっています。主体別ならびに活動分野別の応募割合は、いずれもここ数年ほぼ同じ傾向となっています。

審査結果：各賞の受賞者と活動名称および審査講評を以下に示します。

○大 賞<グランプリ>：福岡県 久留米市立金島小学校

「創作劇「とこしま堰物語」の公演活動～地域の資源（筑後川）を活かした教育活動～」

金島小学校の近くを流れる筑後川に約300年前、5人の庄屋が立ち上がり私財、身命を賭して床島堰・床島用水を築造して、旱害に悩んでいたこの地域を豊穡の地に変えました。金島小学校では、この先人の偉業を明治11年の開校以来、校歌の中で讃えています。ここ20年これを教材として、創作劇「とこしま堰物語」に収斂するユニークで素晴らしい地域教育活動を展開しています。具体的には、1、2年生では床島用水路の安全について学ぶ、3年生では床島用水の位置や役割を学ぶ、4年生では筑後川について広く学習する、5年生では「とこしま堰物語」上演時に音楽隊（歌と効果音）の裏方を務める、そして6年生は「とこしま堰物語」を全員が役について演ずる、と言うように全学年を通して段階を踏んだ一貫した総合学習プログラムとなっているのが特長です。特に、「とこしま堰物語」は、当時の地域と筑後川との係わり、用水開発に対する地元の熱意や堰築造技術についてナレーションなどを通して極めて適格かつ見事に描き挙げており、土木史的にもレベルの高いものとなっています。

第1回で主演を演じた児童が今は小学校の教員となり、志を引き継いで活躍しているそうです。子供たちに水の尊さ、有難さ、大切さについて身近な筑後川と床島堰・床島用水を教材として体得させるとともに、地域のアイデンティティと誇りそして郷土愛を育む、このユニークな取り組みは、水に係わる地域教育活動の模範として極めて高く評価されます。

○国土交通大臣賞：千葉県 PFI佐原リバー株式会社

「“次世代へ繋ぐ”利根川水域交流連携～交流人口拡大と舟運ネットワーク創出がもたらす地域活性化～」

PFI佐原リバー（株）は平成20年から、利根川下流千葉県香取市の「水の郷さわら・川の駅・道の駅」を拠点として、地元の観光協会と協働した親水イベントの開催や水郷文化を体験学習できる舟運域の拡大による地域活性化を目指すいっぽう、市民ボランティアによる水防災教育、緊急時対応の実践など、行政区域を越えて流域交流を意識した川の活用と水防災に関する取り組みを始め、多大な成果を上げています。

東日本大震災では、拠点が被害を受け、一時活動を休止しましたが、新規の航路を開拓するなど、広域舟運ネットワークを創出し、新たな賑わいを作りだして、最近では年間100万人以上の交流人口を達成しています。舟運後継者の育成を目的とした船舶免許教室は延べ1,200人以上が受講したほか、災害時に利用できるEボートの操船大会の開催なども定着しています。また、利根川下流域全体のハザードマップを作成し、水防災の基礎知識から利根川の歴

史文化まで含めた防災教育に取り組み、これまでに16万人を超える人が学習しました。

河川事業分野では、全国的にも先駆的なPFIとして、水辺を活用した地域おこしと水防災教育に多大の成果を上げていること高く評価し、今後の更なる拡大・発展を期待します。また、この取り組みが、今後他の地域の水辺と舟運を活用した民間活力による地域創生へと波及することを期待します。

○環境大臣賞：福井県 サクラマス・レストレーション

「多様な命 つながる九頭竜川へ～サクラマスを河川環境の指標として～」

サクラマス・レストレーションは、九頭竜川の河川環境に魅せられたサクラマスの釣り人達が、川の変化とサクラマスの減少を目の当たりにして、「いつまでもサクラマスが帰ってくるような九頭竜川を日本の川として未来に残したい」という熱い思いを持って全国から集まって、平成20年に結成した団体です。鳴鹿大堰魚道の流量調整への提言や人工産卵場の造成など産卵のための河床環境の改善、サクラマスの遺伝的固有性を守る種苗生産と放流、遡上・産卵などの調査など、行政や漁協と協力した取り組みによって、九頭竜川のサクラマスの遡上数は3～5倍に回復させました。また、地域の子供達への環境学習や体験学習の実施、地元大学や行政機関が主宰する関連イベントへの積極的な協力と参加など、地域に密着した活動を展開しています。

釣り人の川を愛する思いを地道な観察に基づく科学的な提案と実践に結び付けて、サクラマスの遡上数の増加に確実な成果を上げていること、全国的にも稀有な成功例として称賛し、今後の更なる進展を期待します。

○厚生労働大臣賞：東京都 WaQuAC-NET（ワクワクネット）

「ネットワーク活動でアジア地域に安全な水を広げよう」

ワクワクネットは、JICA人材育成プロジェクトの専門家有志が、途上国の会員が水道に関する問題を抱えたときにインターネットを通して日本の会員が経験に基づいて解決策を提案することを主な活動目的として、アジア各国の水道関係者に呼び掛けて平成20年に設立されました。現在、会員数は日本人65名、海外68名を数え、質問に対する回答は、日本人会員からだけでなく同じような課題と経験を持つ途上国会員からも出る双方向型の交流の場となっています。経験豊富なメンバーがインターネットで繋がって迅速に問題解決ができること、インターネット上でこれまでの問題と解決策を公開することによって知見が会員間で蓄積・共有されること、などのメリットがこれまでの取り組みから再確認され、海外、国内とも会員が広がりつつあります。また、カンボジアやタイへ技術指導などのために専門家を派遣したり、研修のために海外会員を日本に受け入れる取り組みも行っています。特に、タイ王国首都圏水道公社とは双方で技術協力協定を交わして、個人的支援から組織的支援へと発展しています。

明治以来、世界最高水準の水道技術と水道システムを築いてきた日本の水道専門家たちが、アジアの水道関係者とネットワークを創りITを活用することによって、効率的かつ的確に問題解決に結び付けていることを日本にふさわしい国際貢献として高く評価し、今後のますますの発展を期待します。

○農林水産大臣賞：福島県 福島市立渡利中学校 科学部

「震災復興へ向けた取り組みを自分たちの手で」

震災直後に放射線のホットスポットとしてマスコミに取り上げられた渡利中学校では、「震災からの復興を中学生の力で何かできないか」を活動テーマに2013年4月に科学部を創設し、地域の基幹産業である農業に注目した研究に着手しました。

これまで、震災直後に出荷規制がかかったハウレンソウの室内での安全な栽培法の研究、塩害土壌の克服に関する研究、風評被害により需要が落ち込んでいる牛乳から生分解性プラスチックを作る研究などに取り組み、研究成果を論文やポスターにまとめて地域の学校や科学館だけでなく、全国規模での学会等でも発表し、高い評価を受けています。特に、津波を被った塩害土壌での野菜栽培の研究では、コマツナやハダイコンの栽培を行い耐塩性が高く、野菜栽培を通しての復興に有効であることを見つけ出しました。また、水草のホテイアオイを用いた実験では、塩分を吸収する能力を明らかにすることにより、田畑に水を張って土壌中の塩分を溶かし出し、ホテイアオイで吸収する方法を提案しています。

郷土の大災害に直面し、これからの復興を担う若者が自らできる復興をという志を立てて主体的に研究活動をしているさまは、同世代の若者を鼓舞するとともに、被災者の皆さんを勇気づけています。

この素晴らしい中学生の活動を称賛し、今後の発展・継続を期待します。

○文部科学大臣賞：静岡県 静岡県立静岡北特別支援学校

「地域と歩む麻機遊水地保全活用プロジェクト「麻活」」

小学校1年から高等部3年までの知的障害のある児童360名が在籍する静岡北特別支援学校は、巴川流域で1974年7月7日の「七夕豪雨」によって約26,000棟の家屋が浸水被害を出したのを契機に作られた麻機遊水地群の中央に位置しています。この遊水地群には、絶滅危惧種を含む貴重な動植物が生息することから、日本重要湿地に指定されています。この特別支援学校では2014年から、行政、地域住民、NPO、専門家、企業等で構成される「麻機遊水地保全活用推進協議会」に加盟し、遊水地群をフィールドに自然再生、環境保全、治水・防災等の切り口として、総合的な学習と職業教育の中心を担う作業学習を進めています。総合的な学習で行われているシートバンク調査や絶滅危惧種の再生と自然復元の実践は学術的にもレベルが高いものと専門家から評価されています。作業学習では、刈り取ったヨシの紙等への製品化や土壌改良剤としての堆肥づくり、竹材を使った竹灯籠、竹粉や竹炭づくりなどのモノづくりに加えて、遊歩道の除草作業や花壇の管理、この地区特有の「麻機蓮根」など農作物の栽培など多様な活動を行っています。

地域社会との密接な連携・協働のもとに展開されているこの活動は、障害者への理解を変容させる効果を持つとともに、地域住民から頼りにされる存在になっています。水防災施設の多面的な価値を向上させるこの取り組みを高く評価し、今後の発展・継続を期待します。

○経済産業大臣賞：大阪府 株式会社スマイリーアース

「循環型環境ストレスフリーを実現したタオル生産プロセスの構築」

スマイリーアースが立地する大阪府泉佐野市は、「日本タオル製造発祥の地」ですが、生産量がピークを迎えた2000年ごろには市内を流れる樫井川は日本一汚染された川になりました。これは、タオルの製造が大量の水と化学薬剤を使ったからです。この会社は、タオル製造のこの欠陥を正すべく、生産プロセスにおける環境ストレスフリーの技術開発に挑戦し、9年掛けて見事に成功を果たしました。

具体的には、生産工程で主に使用するのは、ウガンダ北部平原産の有機栽培綿と同じくウガンダ北部原産のシアバターで作るシアバター石鹼、それに水だけとします。水とシアバター石鹼は、不純物の除去とタオルの吸水性を高める精練・洗いに使用されますが、同社では、その廃水を浄化プール内でメダカや水生生物や動物プランクトンによって自然浄化し、最終的には肥料水として利用できる処理技術を開発。従来の行程と比較して化学薬剤使用量を400分の1、化石燃料使用量を5分の1、産業廃棄物産出量を600分の1にする効果を上げています。

この技術は、他の綿製品の製造にも適用できる可能性があります。また、原料供給地のウガンダ北部の貧困削減と地域格差問題の改善に向けた繊維産業振興のために、JICAと協力してウガンダへこの技術システムを移転する試みも進められています。企業の水循環健全化に資する技術開発の取り組みとして高く評価し、今後の更なる技術の改善と国内外への波及を期待します。

○市民活動賞 読売新聞社賞：栃木県 余笹川流域連携ネットワーク

「余笹川をフィールドにした新たな水文化創造活動」

平成10年8月の那須水害で大きな被害を受けた那珂川水系余笹川、黒川、四ツ川は、4年間で早期に改修されましたが、拡幅や河道整正のための工事によって河川環境は一変しました。余笹川流域連携ネットワークは、改修後の河川環境の変化を調べるとともに、地域住民の流域交流を図ることを目的として平成15年に設立されました。河川環境の変化については、水質調査、魚類調査、河道調査を経年的に続け、「多自然川づくり」の視点から調査結果を取りまとめ、学会発表をするいっぽう、河川管理者に提言を出しています。流域交流としての川の日記念事業（マスのつかみ取り、アユの友釣り教室、リバーレスキュー・カヌー体験など）やよささウォーク（改修された堤防上のハイキング）

は、首都圏からも多数の参加があるイベントとして定着しています。

川を知り、川に接し、川を良くしながら、人を豊かにし環を広げてゆく、この地道な取り組みを称賛し、今後の継続と発展を祈念します。

○国際貢献賞：愛知県 特定非営利活動法人 イカオ・アコ

「フィリピンで有機農業を広め、水源の森を守ろう！」

特定非営利法人イカオ・アコは、通算4年間JICAの草の根技術協力事業としてフィリピン・パタグ村バリグワン地区において住民団体を組織化し、植林事業と生計向上事業（養鶏事業）を行ないましたが、それだけでは、地区住民の生計の向上には繋がりませんでした。そこで事業終了後、高地であるため水利の便がないこの地区に80m下の谷からランポン（電力は使わず水流を動力とする）で水を汲み上げ、約300mの灌漑用パイプを設置して、4haの農地において有機農業の導入を指導して付加価値の高い野菜生産を始めました。これによって、トウモロコシを植えた場合に比べて10～20倍の売り上げになり、生計の向上に繋がります。そして、そこから得られる収入の5%は、水源地としても重要なこの地区の植林地の維持と増強に当てるために現地住民団体に寄付される仕組みを作りました。この取り組みは、多方面からのボランティアの協力によって支えられています。

森林保全と現地民の生計向上を見事に結び付けたこのユニークな国際貢献活動を高く評価し、今後の発展と他地域への波及を期待します。

○未来開拓賞：東京都 八丈町立富士中学校 自然科学部

「災害時に役立つ樹木を利用した雨水を集水する研究活動」

富士中学校自然科学部では、畑での野菜栽培で水やりをしています。畑が水道から離れているので、水を運ぶのに苦労していました。そこで、畑わきの樹木の幹元にひもを巻き、その先をペットボトルに入れて雨水を集めて利用することを思い付き、この方法によって、弱い雨でもきれいな水を集めることができることを確認。次いで、樹木の特徴と集水量との関係について調べて、樹木別には、モチノキが突出して集水量が多く、ヤブニッケイ、ソメイヨシノそれに次ぎ、エノキ、ビロウ、タブノキ、クロマツが少ないこと、集水量が多くなる条件として、①枝の角度が30°以上、②上向きの小枝が多いこと、③上向きの葉が多いこと、④葉の表面が滑らかなこと、など、興味深い分析結果を得ています。また、集めた雨水は、畑への水やりだけでなく、非常時の飲料や炊飯などに使用できることを確かめています。

淡水が貴重な島嶼ならではのユニークな発想に基づく水確保に関するこの実験的研究と興味深い成果の提示を称え、今後に発展を期待します。

○未来開拓賞：大阪府 大阪府立富田林高等学校 科学部

「南河内地域の水環境保全～アユとゲンジボタルの再生活動を通して～」

南河内地域を流れる大和川水系石川では、1970年代の急激な水質汚濁、1980年代の急激な宅地開発、1980年代後半から進められた河川改修により、水環境が劣悪化して水生生物がほぼ絶滅に近い状況になっていました。富田林高等学校科学部では、象徴種として知名度が高いアユとゲンジボタルを選び、これらの再生を目標に掲げて行政、大学、民間団体と連携した活動を展開し、成果を上げつつあります。具体的には、アユが復帰しない原因は、その遡上を妨げる井堰にあることを突き止め、試行錯誤的に手作りの魚道の設置を進めて、昨年アユの遡上を成功させました。ゲンジボタルについては、カワニナの生息環境を作るために竹蛇籠などの設置を進めています。こうした活動は、観察会や研究会、あるいはマスコミへの発信によって、地域の水環境再生への機運を高め、行政における常設魚道設置の検討、大学における魚道設計の研究など、次のステップへと発展しています。

高校生が核となり地域を巻き込んだこの取り組みを高く評価し、今後の発展を期待します。

○未来開拓賞：東京都 水の巡回展ネットワーク

「ゲリラ豪雨展・雨といきもの展全国75館巡回企画展示」

多様な分野（グラフィックデザイン、映像メディア、環境教育、気象キャスター、展示プランナー、河川管理者など）

の専門家有志が集まって、水に関する防災や環境についての展示の開発と全国への巡回というユニークな活動を展開しています。これまでに、「ゲリラ豪雨展」と「雨といきもの展」を創作していますが、いずれも多分野の専門家が互いにアイデアを出し合い、展示物に創意工夫を凝らして子供達にも分かるよう工夫している点が特長です。また、全国に100を超える河川に関する資料館や博物館がある中、最近6年間に各地の企画展等として75館で開催するなど、展示の全国展開を図っているところが特長です。各地の企画展では、それぞれの地域の災害の発生状況等の資料の追加や気象キャスターによる講座の開催などを行い、地域としての展示の充実に尽力しています。

水防災と水環境に関する意識の喚起と知識の普及・継承を容易にする展示法の開発、そして、その全国展開を図るこの取り組みを高く評価し、今後、新たな展示の開発を含めてこの活動が更に発展することを期待します。

○審査部会特別賞：北海道 北海道コカ・コーラボトリング株式会社

「北海道e-水プロジェクト」

このプロジェクトは、北海道の各地域で水環境の保全活動に取り組む団体等の活動支援を通じて、世界的にも貴重な北海道の自然と水環境への啓発と保全に貢献することを目的として、北海道コカ・コーラボトリング株式会社が北海道と平成21年に協定を結び、道と（公財）北海道環境財団との協働事業として発足しました。

北海道コカ・コーラは、地域限定商品の売り上げの一部を活動助成金として提供し、有識者で構成される審査会を通して毎年公募による助成事業が実施されています。これまで7年間に、助成団体は55（延べ74）団体、助成総額は5,200万円に上っています。公募に当たっては、地域の必要性や緊急性を抱えた課題、例えば、水生外来種駆除や河畔林の植育樹活などに重点的な支援が図られています。また、選ばれた助成活動には、社員や行政側が積極的な参加をするなど、双方向型の取り組みになっているのが特長です。

この企業と行政が一体となって実績を上げている水循環健全化への取り組みを高く評価し、今後の継続と発展を期待します。

○審査部会特別賞：宮城県 公益財団法人みやぎ・環境とくらし・ネットワーク

「「水の神さま」を通した市民と農村住民・被災地域住民との交流」

日本では、先人たちが水の大切さ、恐ろしさを実感して敬い、それぞれの地域で様々な「水の神さま」を祀ってきた文化と伝統があります。これらは、開発や世代交代、自然災害により消失しつつありますが、この取り組みは、各地域の「水の神さま」についての言い伝えや歴史を地域の人々からの聞き取り調査を基に伝承することによって、水の大切さや教訓を再発見し発信することを目的に始められました。

宮城県内の100カ所を超える調査のうち、厳選された34カ所についてマップやパンフレットにまとめ、文化施設や環境団体、小中学校などに広く配布するとともにWEBでも公開しています。また、東日本大震災の沿岸部津波被災地では、コミュニティー復興の象徴としての神社や祭りの重要性に気付き、その水文化の伝承と再興に取り組む人々が出てきていますが、そうした人々と都市部の市民との交流会や見学会を開催しています。これは、復興に取り組んでいる人々を励ますとともに、被災地の活性化にもつながります。

「水の神さま」という切り口で、水の恵みと脅威を再認識し、水文化を絆とした地域の再構築を目指すこのユニークな取り組みを高く評価し、今後の更なる進展を期待します。

○審査部会特別賞：岐阜県 特定非営利活動法人 e-plus生涯学習研究所

「水と川を学ぶために～親子教室と体系化学習のアプローチ」

このNPO法人は、平成17年の設立以来、岐阜県を中心として国や自治体あるいは小中学校等における環境学習や環境教育の場の主催や支援、環境学習の教材づくりなどを幅広く手掛けて、地域で信頼される環境学習／教育のコンサルタントの役割を果たしています。

具体的には、各務原市河川環境楽園内の水辺共生体験館における川や水に関連した「おもしろ親子工作教室」と「自然観察会」の開催、岐阜県の「水源林講座」の開催、学校や企業などの要望に応じた専門家や講師の紹介と環境

体験学習の組み立て、「導入→体験→まとめ」というプロセスで構成される「水環境学習の体系化」の考案、ならびにその具体的な適用に関する教材づくりと学校へのアドバイス等多彩な活動を展開しています。

地域、地元企業、学校、自治体と連携し、それぞれが得意な部分を活かして子供たちが楽しく面白く学べる環境学習の仕組みづくりを探索し実践するこの取り組みを高く評価し、今後の更なる発展を期待します。

本年も、地域に根ざしたユニークな活動、志と熱意に満ちた活動、楽しく参加できて継続できるよう工夫した活動、地道に継続し成果を挙げている活動、など、全国各地から多彩・多様な水に係わる取り組みからの応募がありました。

主催者側として大変心強く感じており、応募された皆様に心から感謝申し上げますとともに、受賞された方々に心からお慶び申し上げます。

皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、安全で美しく活力のある地域と国土の形成へ向けて、皆様の活動がますます発展し深化することを祈念して、講評の締めと致します。

審査講評 2017 日本ストックホルム青少年水大賞審査部会長

大阪市立自然史博物館館長

公立大学法人大阪府立大学名誉教授

谷田一三

賞の概要と応募状況:

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校の生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞 (SJWP)」に日本代表として参加することになります。

昨年の日本代表である山口県立山口高等学校 化学・生物部は、「代替生物を用いた安価で斬新なリアルタイムバイオモニタリングシステムの開発」と題して29ヶ国からの代表に混じって大健闘いたしましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は、昨年と比べて7校少ない、全国13校から13件（埼玉2件、大阪2件、岐阜2件、山梨、千葉、愛知、京都、奈良、島根、沖縄、各1件）の応募がありました。いずれも身近な水環境を対象にした力作ぞろいの高校生らしい調査研究でした。

審査経緯

審査は、7人の審査委員からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞 世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、妥当性（水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性が見られるか）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解等が十分か）の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査委員がそれぞれ行った書面審査の結果を持ちよって審議し、上位4チームを選びました。次にこの4チームから、英語による要旨発表及びパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、審査委員による慎重な協議を経て「日本ストックホルム青少年水大賞」と「審査部会特別賞」の授賞校をそれぞれ選定しました。

審査結果と授賞理由

「2017年日本ストックホルム青少年水大賞」に輝いたのは、「リン酸マグネシウムアンモニウム (MAP) を活用した革新的な堤防維持管理技術の開発」と題する調査研究を行った京都府立桂高等学校 地球を守る新技術の開発研究班（代表：増田あすか、コロンボン恵織ネルキ、近藤稜真、指導教諭：片山一平）です。

全国の下水处理場で汚泥や汚水から生成されているリン酸マグネシウムアンモニウム（以下MAP）は、リン含有率の高い副産物です。輸入されているリン鉱石に代わるリン資源として注目され、2014年の廃棄物処理法の改正で、肥料としての販売が可能になりましたが、その利用はまだ進んでいません。

桂高校は、添加される塩化マグネシウムによる雑草種子への発芽抑制作用とMAPによる生育促進に注目して、この下水副産物の活用法を主にノシバを材料として検討し、校内の試験圃場と東日本大震災で影響を受けた鳴瀬川堤防の現地試験において、雑草の発芽抑制とノシバの生長促進という相反作用が両立することを明解に示しています。この材料は、世界的に見ると多様な農業用肥料や緑化資材として活用できると思われます。下水処理副産物の活用として世界的にも重要な発見として、日本ストックホルム青少年水大賞を授与することにしました。

「審査部会特別賞」に輝いたのは、「カワニナを通して考える地域の生態系」と題する岐阜県立岐山高等学校生物部 カワニナ班（代表：二村勇輔、中島拓哉、細川城太郎、指導教諭：神谷恭司）の調査研究です。

琵琶湖固有種のタテヒダカワニナの琵琶湖以外への放流という事実を、地道にデータを積み重ね科学的に解明し放流中止に貢献したことは、大きな成果です。稚貝を含む形態とDNAの両面から分類同定しているのは、高校生のレベルを超えています。

岐阜市の行政の方々との話し合いも根気のいる活動だったでしょう。ホタルを増やすことは、人々の自然に対する意識を高める好ましい活動だと勘違いされています。このような考え方を改善することは困難です。辛抱強く取り組んだ素晴らしい成果です。琵琶湖や岐阜県の自然生態系と人間活動の歴史についても検討され、研究がさらに発展することが期待されます。この活動と成果に、日本ストックホルム青少年水大賞審査部会特別賞を授与することにしました。